

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## On the Use of Onomatopoeia in Interaction : Examples from Japanese Dairy Taster Brunches

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ザトラウスキー, ポリー, SZATROWSKI, Polly メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001609">https://doi.org/10.15084/00001609</a>

## 相互作用によるオノマトペの使用

——乳製品の試食会を例にして——

ポリー・ザトラウスキー

ミネソタ大学／国立国語研究所 共同研究員

### 要旨

オノマトペが試食会のコーパスでどのように用いられているかを考察する。試食会の参加者は3種類ずつの乳製品を対照しながら最初は見た目では色や触感を描写・評価し、次に匂いから特定しようとし、食べ始めてからは味覚と触覚で味、食感等を描写、評価する。相互作用の中で五感と関連させながら、評価・描写の場合は、複数のオノマトペの候補を繰り出す過程が、特定や評価の場合は、オノマトペによる根拠づけが見られた。オノマトペを含む発話の後、同意、不同意、他のオノマトペの提示等の発話連鎖や言葉（オノマトペ）探しからオノマトペのネットワーク性が明らかになった。オノマトペは、参加者が言語・非言語行動を通じて、変化していく食べ物に対する感覚的体験を、一瞬一瞬共有、モニターしながら精密化するのに重要な役割を果たすと考えられる\*。

キーワード：オノマトペ、食感、食べ物、評価、オノマトペのネットワーク

### 1. はじめに

本研究では、乳製品の試食会の会話でオノマトペがどのように用いられているかを考察する。資料は、録音・録画された乳製品の試食会の会話コーパスである（日本語9会話）。乳製品の試食会は7つのコースからなっている。それぞれのコースを食べながら主に出された乳製品について話したり、評価したりする会話である。考察の観点は、乳製品の試食会ではどのようなオノマトペが用いられるか、相互作用の中でオノマトペはどのように用いられるかの2点である。1つ目の観点ではオノマトペをその対象（試食会の乳製品、その他の乳製品、その他の食事、その他）で分類し、異なり語数と延べ語数の傾向について論じる。2つ目の観点では、乳製品の評価（同意／不同意）・描写・特定の中でオノマトペがどのように用いられるかを中心に、試食会の会話の相互作用の中でオノマトペを含む発話連鎖を分析する。オノマトペはPomerantz（1984）のassessment（評価）と類似すると思われる。そこでPomerantz（1984）が考察した「甘い」のような線状的な評価表現とネットワーク性があるオノマトペを含む発話連鎖の異同を考察する。

\* お茶の水女子大学の高崎みどり名誉教授、古瀬奈津子教授、香西みどり教授、石井久美子助教、福留奈美研究員に色々お世話になり、感謝申し上げます。表の作成にご協力いただいたお茶の水女子大学の三浦憂紀氏に特に感謝いたします。また、資料収集、資料作成等にご協力いただいたお茶の水女子大学の三浦憂紀氏、池田來未氏、高岡花江氏、平田杏実氏、瓜生優海氏、是枝優季氏、佐枝富優富氏、岡島みさと氏、佐藤万葉氏、南有紗氏に感謝いたします。試食会の参加者にもお礼申し上げます。本研究は2017～2019年度のミネソタ大学の科学研究費補助金「食事の中の食べ物についての会話における食事規範の動的構築」(Dynamic construction of eating norms while eating and talking about food over a meal)による成果の一部である。また、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(プロジェクトリーダー：石黒圭)の成果の一部をなすものでもある。

## 2. 先行研究

### 2.1 言語学におけるオノマトペに関する研究

従来のオノマトペに関する研究は意味・音声に焦点が置かれており (Hamano 1998; 田守 2002; 田守・スコウラップ 1999), この方向での食べ物のオノマトペに関する研究もある (秋山 2002, 2003; 大橋・シズル研究会 2010; 原田 2012; Noda 2014; 高崎 2015; 武藤 2015; 星野 2015)。実際の会話の相互作用の中でどのように用いられているのかについて考察している研究は少なく, 雑談の話題展開と笑いとの関係 (秦野 2013) のほか, 主に過去の体験を語るストーリーに関する研究であり (Karatsu 2004, 2010, 2012, 2014; Koike 2009, 2014; Sunakawa 2010; Szatrowski 2010a,b; ザトラウスキー 2014c), そのうち食べ物と関係あるストーリー (Karatsu 2014; Koike 2014; ザトラウスキー 2014c) と試食会についての研究もある (ザトラウスキー 2011, 2013, 2017)。また, 日本人と非母語話者のオノマトペの使い方についての研究がある (ザトラウスキー 2015a; 岩崎 2017)。

### 2.2 会話分析での, 相互作用における評価に関する研究

本研究の分析対象である乳製品の試食会で用いられるオノマトペは, 描写と共に一種の評価をしていると考えられる。Pomerantz (1984) は評価 (assessment) に対する同意と不同意の発話連鎖について次のように述べている。評価は参加の産物として作られるものである。評価する話者は, ある対象に対して評価する際, それに関する知識を持っていることを主張する。「一番目の評価」(first assessment) は, 受け手の「二番目の評価」(second assessment) を適切なものとし, 受け手の「二番目の評価」を生じさせる。受け手は, もし評価対象に接したことがないかそれについて知識が不十分である場合, それを理由として「一番目の評価」に対して「二番目の評価」をしないことができるが, それ以外の場合には「二番目の評価」をする。「二番目の評価」は「一番目の評価」の受け手によってなされ, 評価する対象は, 「一番目の評価」の対象と同じである。

「二番目の評価」が「一番目の評価」に同意する場合, 以下の a) ~ c) が見られる。

- a) 格上げ (upgrade) (例: いい→素晴らしい)
- b) 強調表現 (intensifier) (例: きれい→とてもきれい)
- c) 格下げ (downgrade) (例: 素晴らしい→いい)

一方, 「二番目の評価」が「一番目の評価」に同意しない場合は, 以下の a) ~ c) が見られる。

- a) 沈黙, 確認要求, 一部の繰り返し, 修復要求, 名ばかりの同意 (token agreement) <sup>1</sup>
- b) 「一番目の評価」に直接対照させる評価
- c) 「一番目の評価」を否定する

<sup>1</sup> 以下これらの要素は「非優先的応答 (dispreferred response) の要素」と呼ぶことにする (Levinson 1983:19; ザトラウスキー 1993: 19; Schegloff 2007)。

本研究の乳製品の試食会で用いられるオノマトペは一種の評価だと考えられる。ある参加者がオノマトペを用いて食べ物を評価した場合、他の参加者はそれに対して同意か不同意をすることがよく見られる。「一番目の評価」を受け入れない場合、異なるオノマトペを用いることがある。意味が少しだけ異なる場合（ジャリジャリ→シャリシャリ）と、かなり異なる場合（バサバサ→モサモサ→グニャ）とが見られる。Pomerantz (1984) の格上げ、格下げのように同じ線状の目盛り (linear scale) で上がったたり下がったりするよりも、オノマトペのネットワークの中の位置が変わるため、より複雑である。「二番目のオノマトペ」が「一番目のオノマトペ」と意味が異なれば異なるほど不同意の度合いが連続体のように増していくと考えられる。しかし、「二番目のオノマトペ」は「一番目のオノマトペ」とかなり意味が異なっても不同意の「二番目の評価」に伴う非優先的応答の要素が必ずしも見られるわけではない。乳製品の試食会の参加者はオノマトペを用いて評価する場合、食べ物・飲み物に対する知識だけではなく、五感から得られる感覚を主張する。五感に基づく感覚は人によって異なるが、意味が異なっても同じネットワークの中のオノマトペなら（非優先的応答の要素がなくても）許されることも考えられる。

### 2.3 食品科学によるオノマトペに関する研究

食品科学の研究では、お湯を沸かす過程の段階を表現する際に、日本語は英語と中国語に比べてオノマトペがより多く用いられている（福留 2011; Fukutome et al. 2011）。また、食べ物のテクスチャー（口触り、歯ごたえ等）も日英仏中の対照研究では固体の食べ物を破碎する音を表す用語は日英仏中でオノマトペが用いられるが（日：こりこり、がりがり、英：*crunchy*、中：*cuibeng*、仏：*craquant*、英：*crackling* 等）、ほかの種類テクスチャーでは、日本語は英仏中よりオノマトペが多い（Nishihara et al. 2008: 564）。

食べ物のテクスチャーを表す用語を集め、専門家たちにその使用をアンケートで確認した結果、445語が得られ、そのうち約70%（約310語）がオノマトペである（早川ほか 2005）。オノマトペの数え方はいろいろあるが、日本語にオノマトペが2000語以上あるということ（秋田 2017）と比べると、その内の16%を占めていることになる。早川ほか（2011: 363）はテクスチャーの語を「破碎と流動の軸」と「空気による軽さの軸」という2つの次元から分類している。1つ目は「破碎するか流動するか」の対立であり、2つ目は「空気を多く含み固体が詰まっていないことによる軽い口あたり」である。

以下の表1に、早川（2013）のテクスチャーの分類項目と本研究の試食会のオノマトペの例を示す<sup>2</sup>。早川（2013）の分類は、乳製品の試食会で用いられるオノマトペがすべて挙げられていないこと、1つのオノマトペが複数の次元に分類されていること（例えば「サラサラ」= 1.6.1 と 2.3.4; 「フワッ」= 1.3.5 と 2.1.4）、それぞれの項目に複数のオノマトペが分類されていること（例えば

<sup>2</sup> 表1は本研究の資料で用いられるオノマトペであるが、早川（2013）に載っていない例の場合、「乳製品の試食会のオノマトペ」の欄に（）で示す。本研究のオノマトペにはなくてもそれに近い形のものがある場合、「分類項目（早川 2013）」の欄に<>で示す。

表1 早川 (2013) のテクスチャーの分類項目と本研究の試食会のオノマトベの例

番号	分類項目 (早川 2013)	乳製品の試食会のオノマトベ
1.2.1	破碎: 繰り返しの破碎	ジャリジャリ, シャキシヤキ
1.2.2	破碎: 切れやすさ	サクッ
1.2.3	破碎: 破碎や折れやすさ	バリバリ
1.2.5	破碎: 重い	オッモ, オモー
1.3.2	凝集の小ささ (もろさ, こわれやすさなど): 乾いた感じのもろさ	モサモサ, ポロポロ
1.3.5	凝集の小ささ (もろさ, こわれやすさなど): 膨らんだ感じのやわらかさくふわふわ>	フワッ
1.4.4	変化しやすさ: 曲がりやすさ	グニャ
1.5.1	粘りかぬめり: 付着 <ベタベタ>	(ベタつく), (ベトーツ)
1.5.3	粘りかぬめり: 付着と濃厚感	ネットリ
1.6.1	流動となめらかさ: 流れやすさやすべり	サラサラ
2.1.1	空気: かたい気泡壁	スカッ
2.1.4	空気: 軽さと膨らみ <ふわふわ>	フワッ
2.2.5	粒子: 大きめの粒の集まり	ポロポロ
2.3.4	なめらかさと均一性: なめらかさとすべり	サラサラ
2.4.1	粗さと不均一性: 粗さ	ザラザラ
2.4.3	粗さと不均一性: かたい感じの粗さ	ジャリジャリ
2.4.4	粗さと不均一性: 軽い薄片 <しよりしより>	(ジョリ)
3.1.1	脂肪: 油脂の濃厚感	コッテリ

1.2.1 破碎:繰り返しの破碎に「ジャリジャリ」,「シャキシヤキ」, といった特徴がある。また, 乳製品の試食会で用いられるオノマトベがテクスチャー以外のことを表すといたったこともあるため, そのまま適用することは難しかったが, 本研究の試食会で用いられるオノマトベの意味を考察するのに早川 (2013) の分類が役立った。

### 3. 資料

#### 3.1 収集方法

資料は, 録音・録画された乳製品の試食会の会話コーパスである (日本語9会話)。収集の仕方は以前行った日本料理・セネガル料理・アメリカ料理の3コースからなる試食会と同様である (ザトラウスキー 2011, 2013, 2014c, 2015a,b, 2016; Sztatowski 2014a,b)。食べ物に関する研究の資料収集に際し, 無料で主に乳製品からなる食事を食べ, 感想を述べてもらうため, 参加者 (友人と3人で) を募集した。その際, 全員が30歳未満か, または全員が30歳以上であること, 食物アレルギーと食事制限がないことを参加条件にした。参加者は年齢 (30歳未満, 30歳以上) と性 (FFF, FFM, FMM, MMM) の組み合わせである。乳製品の試食会では試食会に来てもらった参加者 (友人と3人で) に食べながらどう思うかを話し合うようお願いし, 試食会を録音・録画した。

乳製品の試食会は以下の7コースからなっている。参加者には試食会で出す物はすべて普通に市販されているものであると伝えたが、どこの商品か、何が入っているかについては試食会が終わるまで教えなかった。それぞれのコースに3種類の食べ物・飲み物を出し、その3種類を区別しやすくするためにナプキン、リボン、食べる道具などそれぞれ青、緑、ピンクの色にした。

コース1 ミルクのコース

コース2 バターのコース（トーストと卵と一緒に）

コース3 ヨーグルトのコース（ブルーベリージャムと一緒に）

コース4 チーズのコース（クラッカーと一緒に）

コース5 ホイップクリームコース（ワッフルとイチゴと一緒に）

コース6 アイスcreamのコース

コース7 クリーマーのコース（コーヒーか紅茶と一緒に）

参加者が前のコースを食べ終わってベルを鳴らしたことを合図に、日本人のアルバイターに次の料理を出してもらった。7コースを食べながら話し合った会話を録音・録画した。

### 3.2 数量的傾向

表2 試食会に用いられたすべてのオノマトペの対象別異なり語数と延べ語数

分類	異なり語数	延べ語数	延べ語数の割合
試食会の乳製品（青・緑・ピンク）	79	180	(35%)
その他の乳製品	43	62	(12%)
その他の食事	75	106	(21%)
その他	93	162	(32%)
合計	251	510	

表2に9つの試食会に用いられたすべてのオノマトペの対象別に見た異なり語数<sup>3</sup>と延べ語数をまとめた。全体は異なり語数が251、延べ語数が510であった。分類は、試食会の7つのコースで出した3種類の乳製品が「試食会の乳製品（青・緑・ピンク）」のオノマトペ、試食会では出さなかったが話題になった乳製品が「その他の乳製品」対象のオノマトペ、「その他の食事」がその他食べること（食べる活動、料理する過程等）に関連するオノマトペであり、「その他」が食べることと関係ない雑談のオノマトペである。「延べ語数の割合」を見ると、「その他」以外のオノマトペ数が約7割を占めていること、乳製品（「青・緑・ピンク」と「その他の乳製品」）が約5割ということから飲食物と食べることを対象にしたオノマトペが多いことが分かる。

<sup>3</sup> 分類別の異なり語数は、その分類の中でのオノマトペのみを対象として異なり語数を数えている。一方、異なり語数の列の合計欄にある数字（251）は、すべてのオノマトペを対象として、異なり語数を数えているため、分類別の異なり語数の単純合計が異なり語数の合計とは一致しない。

表3 30歳未満と30歳以上の参加者の乳製品(乳), 食事(食), すべて(全)に関するオノマトベ数

30歳未満	JPN2 abc fff<30			JPN5 ghi fff<30			JPN1 Lmn Mff<30			JPN7 rST fMM<30			JPN8 FGH MMM<30			横合計		
	乳	食	全	乳	食	全	乳	食	全	乳	食	全	乳	食	全	乳	食	全
コース前																		
ミルク	6	6	6	1	1	2	1	1	3	3	2	3	2	2	2	13	12	16
バター	3	4	12	7	10	12			19				7	10	19	17	24	62
ヨーグルト	4	6	6	5	9	9	4	9	3	4	4	6	2	3	3	19	31	27
チーズ	5	9	17	2	10	10	7	13	19				1	3	10	15	35	56
ホイップクリーム	6	10	11	2	3	7	4	7	7	2	2	5	4	4	4	18	26	34
アイスクリーム	4	6	7	3	4	9	6	8	11	1	7	8	5	6	6	19	31	41
クリーマー	1	2	4	7	13	13	2	3	4	3	4	8	2	3	5	15	25	34
乳の縦合計	29			27			24			13			23			116		
食の縦合計	43			50			41			19			31			184		
全の縦合計	63			62			66			30			49			270		
乳の平均	10			9			8			4			8			8		
食の平均	14			17			14			6			10			12		
全の平均	21			21			22			10			16			18		
参加者別の合計	a	b	c	g	h	i	L	m	n	r	S	T	F	G	H			
	16	17	30	21	15	26	21	13	32	5	18	7	25	4	20			

30歳以上	JPN6 stu fff>30				JPN3 Def Mff>30			JPN9 IjK MfM>30			JPN4 ABC MMM>30			横合計					
	乳	食	全	乳	食	全	乳	食	全	乳	食	全	乳	食	全	乳	食	全	
コース前			1															1	
ミルク	4	5	9				3	5	18	1	1	1				8	11	28	
バター	10	10	12				9	17	27	3	5	17	2	2	2	24	34	58	
ヨーグルト	12	13	16				5	6	11			7	8				17	26	35
チーズ	22	22	22				4	8	11				1	1	1	27	31	34	
ホイップクリーム	12	16	21				12	12	18	3	3	3				27	31	42	
アイスクリーム	7	7	12				9	10	12				1	1	4	17	18	28	
クリーマー			1				5	7	13							5	7	14	
乳の縦合計	67				47			7			4			125					
食の縦合計	73				65			16			4			158					
全の縦合計	94				110			29			7			240					
乳の平均	22				16			2			1			10					
食の平均	24				22			5			1			13					
全の平均	31				37			10			2			20					
参加者別の合計	s	t	u	z	D	e	f	I	j	K	A	B	C						
	42	28	23	1	15	55	40	4	16	9	2	2	3						

※表中の参加者「z」は試食会のコースを出した日本人のアルバイターである。

乳の全員の合計 241  
食の全員の合計 343  
全の全員の合計 510

表3に30歳未満と30歳以上の参加者のコース別の乳製品(乳), 食事(食), すべて(全)に関するオノマトベ数をまとめた。「乳」は試食会の乳製品(青・緑・ピンク)とその他の乳製品を対象にしたオノマトベである。「食」はその他食すること(食べる活動, 料理する過程等)に関連するオノマトベである。「全」はすべて, つまり「乳」「食」と「その他(食することと関係ない)」のオノマトベである。上の行の「JPN1 Lmn Mff<30」等は, 会話名(JPN1), ビデオカメラから見て左から順に座っている参加者のアルファベット(Lmn)(大文字は男性, 小文字は女性), 性(f=女性, M=男性)と年齢(「Mff<30」=30歳未満の男性1人と女性2人)である。

合計を比べる際, 30歳未満は5グループあったのに対し, 30歳以上は4グループと少ないことを考慮する必要がある。すべて(「全」)のオノマトベ数の縦合計の右端は30歳未満(270÷5=54)が30歳以上(240÷4=60)とほぼ同じである<sup>4</sup>。「全の縦合計」(グループ別)で見ると, 30歳以上の男性1人と女性2人(JPN3=110)が一番多く, 30歳以上の女性3人(JPN6=94)も

<sup>4</sup> 本稿の資料は小数第1位を四捨五入で示してある。

多いが、男性 2 人女性 1 人の 30 歳未満 (JPN7=30) と 30 歳以上 (JPN9=29) とが少なく、30 歳以上の男性 3 人 (JPN4=7) が一番少なかった。対象別に見た全の縦合計は、食 (食の縦合計) の 30 歳未満 (184 ÷ 5=37) と 30 歳以上 (158 ÷ 4=40) はほぼ同じであるが、乳製品 (乳の縦合計) の 30 歳未満 (116 ÷ 5=23) と 30 歳以上 (125 ÷ 4=31) では、30 歳以上が少し多い。グループ別では、30 歳以上の JPN4 以外「食」のオノマトペは「乳」より多い。表の下の参加者別の合計を見ると、30 歳以上の女性 e(55) と s(42), f(40) が一番多く、30 歳以上の男性 A(2), B(2), C(3), I(4), 30 歳未満の男性 G(4), T(7) と女性 r(5) が少ないことから個人ではらつきがあり、女性は男性よりオノマトペを多く用いる傾向がある。またグループによって 1 人 (30 歳未満の JPN2 の c, JPN7 の S, 30 歳以上の JPN6 の s, JPN9 の j) か 2 人 (30 歳未満の JPN5 の g と i, JPN1 の L と n, JPN8 の F と H, 30 歳以上の JPN3 の e と f) がより多く用いることがある。この傾向が発話数と関係ある可能性については今後の課題にしたい。

表 4 30 歳未満と 30 歳以上の参加者の乳製品 (乳), 食事 (食), すべて (全) に関するオノマトペ数 (多から少の順)

30 歳未満	乳	30 歳以上	乳	30 歳未満	食	30 歳以上	食	30 歳未満	全	30 歳以上	全
アイスクリーム	19 チーズ	27	チーズ	35	バター	34	バター	62	バター	58	
ヨーグルト	19 ホイップクリーム	27	アイスクリーム	31	チーズ	31	チーズ	56	ホイップクリーム	42	
ホイップクリーム	18 バター	24	ヨーグルト	31	ホイップクリーム	31	アイスクリーム	41	ヨーグルト	35	
バター	17 ヨーグルト	17	ホイップクリーム	26	ヨーグルト	26	ホイップクリーム	34	チーズ	34	
クリーマー	15 アイスクリーム	17	クリーマー	25	アイスクリーム	18	クリーマー	34	アイスクリーム	28	
チーズ	15 ミルク	8	バター	24	ミルク	11	ヨーグルト	27	ミルク	28	
ミルク	13 クリーマー	5	ミルク	12	クリーマー	7	ミルク	16	クリーマー	14	
コース前	0 コース前	0	コース前	0	コース前	0	コース前	0	コース前	1	
合計	116	125		184		158		270		240	

表 4 に 30 歳未満と 30 歳以上の参加者のコース別の乳製品 (乳), 食事 (食), すべて (全) に関するオノマトペ数 (多から少の順) を示した。左側に乳製品に関するオノマトペ数を挙げた。乳製品に関するオノマトペが多く用いられる傾向は 30 歳未満がアイスクリーム・ヨーグルト, ホイップクリーム, バターの順, 30 歳以上がチーズ, ホイップクリーム, バターの順であり, ホイップクリームとバターが共通しているが, 30 歳未満はアイスクリームとヨーグルト, 30 歳以上はチーズの感覚にとりわけ関心があり, 若干異なるようである。ホイップクリームが多かったのは食感を対照するのにオノマトペが用いられたこと, バターが多かったのは参加者がバターだけ食べることが初めてだったことと関係あるだろう。一方, 乳製品に関するオノマトペが少ない傾向は 30 歳未満がミルク, チーズ・クリーマーの順, 30 歳以上がクリーマー, ミルクの順であり, ミルクとクリーマーが共通している。ミルクは, 普段飲んでいること, ほかの固体による乳製品と異なり, 液体であることと関係があるだろう。真中の「食」と右の「全」は, 30 歳以上は「乳」と同じ傾向があるが, 30 歳未満ではチーズが多くなっている。これは 30 歳未満でチーズの切り方, チーズの入れ物の開け方に関する話があったからだろう。

#### 4. 分析

##### 4.1 乳製品の試食会で用いられるオノマトペ

乳製品の試食会で用いられるオノマトペを表 5 にまとめた。



(表5 続き)

ホイップ	異6 延7	1	コツテリeD	異1 延1	3	(青線)ホワホワb	異18 延26	異19 延24	67
クリーム		1	コツテリe	1	コツテリLuT	1	フワーツus	2	1
		1	モツサリc	1	フワツL	1	フワーツus	2	1
		5	モツタリs	1	フワツL	1	フワーツus	2	1
		1	アツサリK	1	ベチヤツL	1	ベツタリi	1	1
		1	フワツcc	1	コツテリuj	2	ベタベタi	1	1
			フワツアb	2	コツテリーツt	1	ニユツu	1	1
			シツカリFF	2	トロントt	1	サツバリu	1	1
					トロトロs	1	コツテリK	1	1
					ベチヨツus	2	シヤビシヤビb	1	1
					ホワツF	1	シヤーツa	1	1
					フワツアb	1	サツバリf	1	1
					ビチヤビチヤef	2	クイグイン	1	1
					ピシヤD	1	ガーツc	1	1
					タツアリF	1	ガーi	1	1
					シユワシユワf	1			
アイス	異5 延9	1	シヤリシヤリneedHHH	異7 延10	8	シヤリツmm	異7 延7	異12 延14	59
クリーム		1	サラサラeS	1	コツテリe	2	ジャリジャリcf	2	2
ネットリnt		2	ジョリb	1	シヤリシヤリi	1	シヤリシヤリi	1	1
			フワツe	1	ツルツut	2	ガーツnc	2	2
			サツバリfc	2	フワツ-フワツe	1	シユリcb	2	2
			シヤリツtss	4	ドロツC	1	シユツST	2	2
			シヤカシヤカH	1		1	サツバリrSS	4	4
			シヤキシヤキF	1		1	ブシユツF	1	1
クリーマー	異3 延4	1	シヤバシヤバfee	異8 延20	異6 延8	異4 延5	異7 延12	49	
		1	サラサラhgg	3	コツテリeD	1	バーツi	1	
		1	サラサラr	1	ドロツhh	2	ドンドンソンドンL	1	
		1	ドロドロT	1	サツバリg	1	ドンドンh	1	
					トロトロS	1	サーツc	1	
							コロコロH	1	
							クルグルe	1	
							クイグイü	2	
							キユーツe	1	
							ガブガブig	2	
							ガツツリT	1	
合計	異4 延4	40	異3 延7	異4 延6	79	異3 延3	異10 延12	32	
			50			73	106	348	

試食会でどのようなオノマトベが用いられるかについては、前掲の表5に青・緑・ピンクの乳製品、その他の乳製品、その他の食事に関するオノマトベの異なり語数と延べ語数をまとめた5。「ザラザラ」(バター：ピンク／チーズ：ピンク、その他の食事／アイスクリーム：緑)、「コッテリ」(バター：その他の乳製品／ホイップクリーム：緑、ピンク、その他の乳製品／アイスクリーム：ピンク／クリーマー：ピンク)のように同じオノマトベを複数の対象に用いる場合がある。「サラサラ caSSS」(ミルク：青)のオノマトベの後の「caSSS」はそのオノマトベを用いた参加者のアルファベットであり、複数ある場合 JPN1～JPN9 の試食会で用いられる順番で並んでいる。1回しか用いられないものが多いが、ミルクのコースは青が「サラサラ」(5)、「サラッ」(4)、バターのコースはピンクが「フワフワ」(3)、「パリパリ」(3)、その他の乳製品で「タププリ」(5)、ヨーグルトのコースはピンクが「ネットリ」(7)、その他の乳製品で「ポロポロ」(3)、その他の食事で「シュワシュワ」(5)、チーズのコースはピンクが「パサパサ」(3)、その他の乳製品で「シャーーーーーッ」(4)、「ベラ」(3)、ホイップクリームのコースは青が「サッパリ」(5)、ピンクが「フワッ」(3)、アイスクリームのコースは緑が「シャリシャリ」(8)、「シャリッ」(4)、その他の食事で「サッパリ」(4)、クリーマーのコースは緑が「シャバシャバ」(3)、「サラッサラ」(3)のように複数用いられるオノマトベがあった。

表6 その他のオノマトベの使用回数(多から少の順)

チーン	19	バーン	2	ギリギリ	1	ヌッ	1	ブワブワ	1
チン	12	バーン	2	グサッ	1	スルスル	1	ベベベベベベポコ	1
ワチャワチャ	9	バキバキ	2	グシャ	1	バカッ	1	ベリーッ	1
ボンボン	6	バンバン	2	クヨクヨ	1	バサッ	1	ホイッ	1
カチカチカチ	3	バンバン	3	ゴリゴリ	1	バスッ	1	ホーッ	1
サッ	3	ビッ	2	サラッ	1	バタン	1	ボーン	1
トゥーン	3	ボーン	2	ジャーーーン	1	ハチャメチャ	1	ボーンッ	1
ポーッ	3	ワッ	2	ズッ	1	バッチリ	1	ボタボタボタボタ	1
リーン	3	イラッ	1	スルスル	1	パン	1	ボッサボサ、ボッサボサ	1
イライラ	2	ガーッ	1	タンタンタン	1	バンバンバンバン	1	ボヤボヤ	1
カッ	2	ガクーン	1	チ	1	ビーン	1	モヤッ	1
ガラガラ	2	ガクブルガクブル	1	テッカテカ	1	ビキーン	1	ユラリ	1
クッ	2	ガッ	1	テッテレー	1	ビッ	1	ユラリユラリ	1
シーン	2	カチカチ	1	ドキーッ	1	ヒョイッ	1	リン、リン	1
シッカリ	2	ガッ	1	ドキドキ	1	ビョーン	1	ルーー	1
ズーッ	2	カバッ	1	トン	1	ピンボーン	1	ワーッ	1
スッ	2	ガリガリ	1	ドンドン	1	フッ	1		
ティーン	2	ガンガン	1	ニヤニヤ	1	ブョーッ	1		
トーン	2	キラキラ	1	ニョキ	1	フリッフリ	1		

表6にその他のオノマトベの使用回数(多から少の順)をまとめた。「チーン」(19)、「チン」(12)、「トゥーン」(3)等が多いのは試食会でコースが終わって次のコースを呼ぶためのベル、「ワチャワチャ」(9)、「カチカチカチ」(3)は職場の雰囲気、「ボンボン」(6)は卒業式に着る羽織が話題になったからである。

<sup>5</sup> その他の乳製品の欄には試食会で出された青・緑・ピンクの乳製品2つ以上を対象にしたオノマトベ(青緑ピ)やその内の1つとほかのものの組み合わせを対象にしたオノマトベ(ピとクラッカー)を入れた。発話の中でオノマトベが否定されたことを表では¬(否定記号 not)で記す。例えば表の(青のヨーグルトに対して)「¬ポロポロ」は発話中では「ポロポロでもないなた//ぶん。||」。(ピンクのミルクに対して)「¬グビグビ」は「グビグビ飲めない。」である。

#### 4.2 試食会の相互作用におけるオノマトペの用い方

相互作用の中でオノマトペはどのように用いられるかについては、参加者は最初見た目で色や触感（食感）を評価・描写し、匂いから特定しようとした<sup>6</sup>。また、食べ始めてから口当たりや喉越しによる食感を描写し、味と食感を評価した<sup>7</sup>。特定と評価をする場合、ほかの描写を根拠にしたり、オノマトペを根拠にしたりしたが、描写の場合、複数のオノマトペを繰り返す過程が見られた。オノマトペを含む発話の後、同意、不同意、ほかのオノマトペの提示等があった。

#### ミルクのコース

まず、ミルクのコースからの例であるが、【例1】は、ミルクのコースが出されたところで試食をし始めている<sup>8</sup>。3人の30歳未満の女性（a, b, c）が緑のミルクの匂い、食感、味をオノマトペで評価（描写）し合う。1aで緑のミルクを嗅いだ後牛乳だと特定し、aとcはそれぞれ3aと4cで同意する。

【例1】 Dairy16-JPN2-1f2f3f-abc-WAS1-blue abc (ff<30)

ミルクのコース (6:47-11:07) 7:17-8:15<sup>9</sup>

((a: 右手で緑のミルクを口元に持ち上げ、匂いを嗅ぐ。))

1a (1.0) 牛乳、めっちゃ、牛乳。 #緑のミルク  
#とても牛乳の匂いがする。

2c 牛乳? ※ a: 緑のミルクを飲み始める。

3a うん。

4c 牛乳。 ※緑のミルクの匂いを嗅ぐ。

((a: 緑のミルクを飲む；bc: 緑のミルクを飲み始める。))

5a (4.0) @ぬるい。@ // {アッハッハ} || #緑のミルク

6c // なんか甘く感じる。|| #緑のミルク

7b // (?????) ||

8b あでもなんか後味一、がやっぱぬるいからか = #緑のミルク #後味一 = あとあじー



<sup>6</sup>「特定」(identification)とは、食べたり、飲んだりしている物についてそれが何か、どのようであるか(味、匂い、舌触り、見た目等)を認定する行為である。

<sup>7</sup>資料では、食べ始める前は触感は手で触る感覚、「見た目(食感)」は目で見て感じた食感、食べ始めた後は口の中の「食感」にしたが、複数の五感で表現すること、例えば見た目で食感を表現できること等は今後の課題にしたい。武藤(2015)は小説等に用いられるオノマトペを分析し、1つのオノマトペが複数の感覚を表すことができると述べている。

<sup>8</sup>資料で用いる表記等については稿末の「文字化資料の表記方法」参照。オノマトペはカタカナで示し、オノマトペを含む発話を網掛けで示す。

<sup>9</sup>【例1】の後のDairy16-JPN2-1f2f3f-abc-WAS1-blueは資料のファイル名であり、Dairy16が2016年に撮った乳製品の試食会、JPN2は言語が日本語で、2つ目の会話、1f2f3fは3人の女性の参加者の番号、abcは参加者のアルファベット、WAS1-blueはビデオカメラの名称である。その後のabcは左から右に座っている順の参加者のアルファベット、(ff<30)は女性3人とも30歳未満ということを表す。「ミルクのコース(6:47-11:07)7:17-8:15」は、【例1】が、6:47から11:07まで続く「ミルクのコース」における7:17から8:15までの部分であることを示す。図に示す乳製品の写真はモノクロであるが、ナブキン、容器のリボン、ナイフ、フォーク、スプーン等の色は、左から順に、青、緑、ピンクとなっている。以下の例も同様。

※ aが青のミルクをゆっくり口の前まで持ち上げる。

9b **ベタつく。** #緑のミルク

((a: 青のミルクを飲み始める。))

10a (3.0) ん？

11a こっちも牛乳？ = #こっち=青のミルク

12b =あ、牛乳の匂いしない気がする。 #青のミルク ※青のミルクを飲み始める。

13c ん？

14c わかんない。

15c 鼻が悪い。

((c: 青のミルクを飲み始める。))

5a～9bでは何がきっかけでオノマトペを用いるかを考える。3人が緑のミルクを飲んでからaが5aで笑いながら「@ぬるい。@」と温度を否定的に評価して笑い、cがaの笑いと重ねて「甘く感じる」と味を評価する。次にbが8bでぬるいことを理由にして、9bで「ベタつく。」(後味に粘着性がある)というオノマトペで否定的に評価する。このようにaが評価した温度を繰り返す(同意し)、それを理由にして食感を表すオノマトペを用いる。(1)に示すように温度に関する評価を理由にしてオノマトペを1つ独立して用いる流れである。

(1) 緑：aぬるい→c甘く感じる→bぬるいからベタつく

次にaは11aで青のミルクは牛乳かどうか疑問を持ち、bが12bで「牛乳の匂いしない気がする。」と言う。それに対してcが13c～15cで鼻が悪いため分からないこと、つまり(感覚に関する)知識がないことから、匂いに関する評価をしない。

【例2】は、【例1】と同じ会話で、青のミルクを飲んだ後であるが、3人の女性が初めに青のミルク、次にピンクのミルクの食感と味をオノマトペで評価(描写)し合う。

【例2】 Dairy16-JPN2-1f2f3f-abc-WAS1-blue abc (fff<30)

ミルクのコース (6:47-11:07) 7:17-8:15

((bc: 青のミルクを飲む。))

22a (1.5) でもなんか、薄い。 #青のミルク

23b ん、なんだろう。

24b 後味一、の一粉っぽさがすごい低脂肪、な気がする。 #青のミルク

25c～ 喉越しが一番いい気がするこれ。 #これ=青のミルク

26c～ わかんないけど。

27a @喉越し。@ // {フハハ} ||

28b // {フフフ} ||

29c // {フフフフフ} ||

30a ・@ (?-?-) @・

- 31c // @だからわかんないけど。@ ||
- 32b // おじさんみたいだった。||  
# cの「喉越しが一番いい」という発話は、おじさんのような発話だった。
- 33c 飲んだ時のなんかスカッとさ。 # 青のミルク
- 34a うん。
- 35a なんか、すごい見た目も、ほんとに水っぽい。 # 青のミルク
- 36c うん＝
- 37c なんかサラサラ、サラ // サラして。|| # 青のミルク
- 38a // ね。||
- 39a サラサラしてる。 # 青のミルク
- 40c 一番なんかドロドロしてるのは、豆乳。＝ # 豆乳＝ピンクのミルク
- 41b 〃これって全部飲むの。〃 # これ＝ミルクのコースの3種類のミルク  
# 本当にミルクを全部飲んでしまうか尋ねている。
- 42a // そうだね。||
- 43c // どうなんだろう。||
- 44c お腹クブクブになるよ。// {ハハハハ} || # お腹に水が溜まったようになる。
- 45a // {アハハハ} ||
- 46b // {アハハハ} ||

まず、aが青のミルクを22aで「薄い」と評価する。それに対してbが24bで「後味一、の粉っぽさがすごい低脂肪、な気がする。」で後味の粉っぽさから低脂肪（の牛乳）だと特定する。次にcの25c「喉越しが一番いい気がするこれ。」の青のミルクについての評価に対してaが27aで笑いながら「@喉越し。@」を繰り返す、cの評価に対する疑問を示し、3人で笑う。そして、bが32bで25cの発話が「// おじさんみたいだった。||」という笑いの根拠を明確にする。そこでcがさらに33cで「スカッとさ。」というビールのコマーシャルでおじさんが使いそうなオノマトペで青いミルクの喉越しの爽やかさを評価する。このように笑いの場面はそれに合わせた名詞化されたオノマトペで終わっている。

次に、aが（22aの「薄い」の延長線で）35aで「すごい見た目も、ほんとに水っぽい。」と青のミルクを否定的に評価し、それに対してcが（33cで言ったことを）37cではおじさんではない普通の口調で青のミルクの食感は「サラサラ、サラ // サラして。||」で水分が多く舌触りが軽いというオノマトペで肯定的に評価している。cの肯定的な評価は35aのaの否定的な態度と反対なのに、（「なんか」以外の）非優先的な応答に伴う要素が用いられていないのは興味深いことである<sup>10</sup>。cの肯定的な評価に対してaが38a～39a「// ね。|| サラサラしてる。」でオノマトペの繰り返しによって同意している。

<sup>10</sup> aは見た目、cは食感で、異なる五感に基づいてそれぞれ否定的と肯定的に異なる評価をしているため、非優先的な応答に伴う要素を用いる必要がないことも考えられる。

続いてcがピンクのミルクを対照させ、40cで「一番なんかドロドロしてる」で、お腹が一杯になる話の締めくくりとして44cで「お腹タプタプになるよ。」(ミルクを全部飲み干すとお腹に水分がたくさん溜まる)でオノマトペを用いる。このようにオノマトペに切り替える一種のスタイルシフトが起こり、オノマトペを含む発話連鎖が連なっていく。(2)に示したように、青のミルクに関して初めはオノマトペを用いずに「喉越しが一番いい」と評価され、「@喉越し.@」に続いて「スカッとさ」でオノマトペに替わり、また「水っぽい」の後「サラサラ、サラ//サラ」に替わり、「サラサラ」と繰り返されるが、その後それと対照させピンクのミルクを「ドロドロ」、最後に「お腹タプタプ」というオノマトペ連続が見られる<sup>11</sup>。

- (2) 青：c 喉越しが一番いい→c スカッとさ→a 水っぽい→c サラサラ、サラサラ→a サラサラ  
 ラ○↔ピンク：c ドロドロ→お腹：c タプタプ

### バターのコース

次はバターのコースからの例であるが、【例 3a, 3b】は【例 1, 2】と同じ参加者の会話であり、3人の参加者が3種類のバターの見た目をオノマトペで評価(描写)し合う例である。8a～9aの「//えでもなんかこれ||がー、へっなんか、質感が//違くない?||」からピンクのバターの質感(食感)についての話が始まる<sup>12</sup>。

【例 3a】 Dairy16-JPN2-1f2f3f-abc-WAS1-blue abc (fff<30)

バターのコース (11:07-29:10) 12:15-12:48

1a //いただきまーす。||

2c //いただきまーす。||

3a これ、マーガリンとかあるかな。

#これ=バターのコース

4b 色ー//ー。||

5c //色||ー。

6b 色ーわからないー?

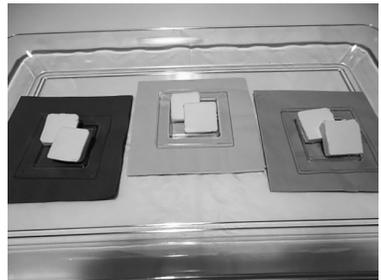
7c //全部同じ、じゃない?||

8a //えでもなんかこれ||がー、 #これ=ピンクのバター

※「これ||がー」から12cまでテーブルに手首をかけた右手(平前下指1～3,5開曲指先前)の指4(伸指先前下)でピンクのバターを指す。途中の9aの「か、質感」で指4を3回下に下ろすことで、3回ピートを打ち「質感」を強調する。

9a へっなんか、質感が//違くない?|| #違くない?=違うよね。

10c //汗かいてる。|| #バターに水滴が付いている



<sup>11</sup> 以下の会話の流れを示す図では、○=同意、×=不同意、△=どちらとも言えない、↔=対照、¬=否定(not)の意味を持つ。

<sup>12</sup> 非言語行動の記述では親指から小指の順で指1～5と呼び、手の高さを手首を基準にしている。(詳しくはザトラウスキー(2010c)参照。)

11b // ほんとだー。||

12c // あー、ザラザラ || してる。 # ピンクのバター

13a 一番左がなんかベトーって感じだー。 # 一番左 = 青のバター

※「一番左がなんか」で右手(平下指 1,3 ~ 5 握)の指 2(伸指先内前下)で青のバターを指す。  
「ベトー」で全指を開きながら伸ばすことで、バターが広がることを表す。

14b なんかなんか色ー、下になった部分の // 色 || がこれ黄色くない?

# これ = 緑のバター

※ 1 つ目の「色」で緑のバターの皿を胸の高さまで持ち上げ、見る。「黄色く」で緑の皿を胸上の高さに持ち上げ、テーブルに下ろす。

15a // 右に。||

c が 9a と重なって 10c で「// 汗かいてる。||」と言うが、9a に対して 12c 「// あー、ザラザラ || してる。」でオノマトペを用いてピンクのバターの見た目(食感)が粗いと評価する。そして、a がピンクのバターと対照し、13a で「一番左がなんかベトーって感じだー。」で青のバターの見た目は粘着性があると評価を下す。つまりピンクのバターと青のバターを対照するためにオノマトペを用いている。「ベトー」で右手(平下指 1,3 ~ 5 握, 2 伸指先内前下)全指を開きながら伸ばすことで、バターが広がることを表す身ぶりをしている。

【例 3b】 Dairy16-JPN2-1f2f3f-abc-WAS1-blue abc (fff<30)

バターのコース (11:07-29:10) 12:15-12:48

16a なんか、右 // にー、行 || くほどさ、

17b // 全部黄色いか。||

18a なんかにサササしてない?

※ b: 「なんか」で右手で青のバターを胸下の高さに持ち上げ、すぐテーブルに下ろす。

19c あわか // る。||

20b // わ || かる。 =

21c = なんか断面が、なんか。

22a ね。

23c そうだよね。

24a うん。

25c // 一番、右が。|| # 一番右 = ピンクのバター

26a ~ // なんかに真 || ん中チーズっぽいんだけどめっちゃ、見た目が。

# 真ん中 = 緑のバター

27c 確かにー。{へっへー}

28c いただきます。{フフフ} ※ ab: 青のバターを食べる。

【例 3b】は【例 3a】の続きである。16a「なんか、右 // にー、行 || くほどさ、」と 18a「なんか

「パサパサしてない？」で a は左から右へ行くに連れてパサパサ感が徐々に増していくと言う。それと同時に 16a で右指 2 (伸指先前下) を伸ばした右手 (平内指 1 曲指 3～5 揃握) を右 (青のバターの上からピンクのバターの上) へ動かしながら途中の「右」の「み」で青のバター, 「に」で緑のバター, 「行 || く」の「い」でピンクのバターで下に下ろすことで、それぞれのバターを指しながら青, 緑, ピンクの順を示す。さらに 18a でまた右手を青のバターの上から右に動かしながら, 「パサパサ」の最初の「パサ」と 2 つ目の「パサ」で右手 (平下指 1,2,5 曲) の指 3,4 (伸指先前下) を緑のバターとピンクのバターの上で a (自分) から前にそれぞれ 1 回 (2 回目は 1 回目より強く) 合計 2 回動かすことで、緑とピンクのバターを指しながらバターの荒れている表面と切口の傾斜を表している<sup>13</sup>。これはオノマトベは図像的な身ぶり (iconic gesture)<sup>14</sup> を伴うことが多いと言われている (Kita 1997) 例になる。

19c から 24a で 3 人が同意し合い, 21c の「=なんか断面が、なんか。」と 25c 「// 一番、右が。||」に対して a が 26a で「// なんか真 || ん中チーズっぽいんだけどめっちゃ、見た目が。」で緑のバターの見た目がチーズに見えることを言うてから 3 人がバターを食べ始める。(3) は【例 3a, 3b】の流れを示すが、見た目の質感 (食感) は、ピンクと青のバターを対比させる「ザラザラ」と「ベトー」(身ぶり付き) を用い、次に 3 種類のバターの「パサパサ」感の乾燥度合いをオノマトベと身ぶりで表す。

(3) ピンク : c ザラザラ ↔ 青 : a ベトー → 青緑ピンク : a パサパサ (青く緑くピンク)

【例 4】では、【例 1～3】と異なる 30 歳未満の女性 3 人 (g, h, i) がバターのコースが出されたところで試食をし始めている。ピンクのバターの見た目をオノマトベで評価 (描写) し合う。

【例 4】 Dairy16-JPN5-6f7f8f-ghi-WAS1-blue ghi (fff<30)

バターのコース (11:50-28:40) 12:08-12:18

1g え、なんかこれもちちょっと違う。 # これ=バターのコース

2i **なんか、ピンク、パリパリ。** # ピンクのバター

3g **ピンクパリパリだね。** # ピンクのバター

4h え、これパリパリなの。 # これ=ピンクのバター

5g **モサモサ、モサモサ。** # ピンクのバター

6h **なんだろ。**

7h **グニャ<sup>o</sup>って感じ。** # ピンクのバター

8g **ピンクいこ、ピンクいこ。** # ピンクのバターを食べよう。 # いこ=いこう

9i **ね。**

10i **ピンクいこう。** # ピンクのバターを食べよう。

<sup>13</sup> この身ぶりの解釈は中央学院大学の水藤新子准教授との個人的な会話による。

<sup>14</sup> 図像的な身ぶり (iconic gesture) は、発話の意味と密接に関係し、身ぶりの実行や仕方が、発話の中で同時に言及される具体的な出来事や物、動作を表す (McNeill 1992)。

1g のバターのコースが前のミルクのコースと違うという感想の後、i は 2i でピンクのバターの見た目が「なんか、ピンク、パリパリ。」(表面が乾燥している)と評価する。それに対して、g が 3g 「ピンクパリパリだね。」で「パリパリ」を繰り返すことと「ね。」によって同意する。ここまでは優先的応答の発話連鎖になっているが、次に h が 4h 「え、これパリパリなの。」で「え、」の聞き返しと「パリパリ」の繰り返しによる確認で非優先的な応答の要素を用いた不同意を示している。その後、その代わりに 5g 「モサモサ、モサモサ。」(水分が少なく脆い)と 7h 「グニャって感じ。°」(柔らかく、曲がりやすい)のオノマトペの候補が出される。

「パサパサ」→「モサモサ、モサモサ」→「グニャ」では、見た目の食感を徐々に水分が増すオノマトペの段階的变化で示しているが、これらは異なる食感の観点でもあり、音の変化からもオノマトペの意味ネットワークの位置が異なるように見える。しかし、5g の「モサモサ、モサモサ。」と 7h の「グニャって感じ。°」は 4h の「え、これパリパリなの。」と異なり、非優先的な応答に伴う要素は用いられていない。これは【例 2】の 35a 「なんか、すごい見た目も、ほんとに水っほい。」→ 36c ~ 37c 「うんなんかサラサラ、サラ // サラして。||」と類似している。g と h はオノマトペを置き換えるだけでオノマトペの連鎖が連なっていく。【例 4】は、(4) に示すように i, g, h がいっしょになって複数のオノマトペからふさわしいものを選ぶ過程に参加している。

(4) i オノマトペ 1 評価 → g 繰り返し同意 → h 繰り返し不同意 → g オノマトペ 2 評価 → h オノマトペ 3 評価

ピンク : i パリパリ → g パリパリ ○ → h パリパリ なの。(疑問) × → g モサモサ、モサモサ → h グニャ

#### ヨーグルトのコース

【例 5a ~ 5f】は 30 歳以上の女性 3 人 (s, t, u) が参加しているヨーグルトのコースからそれぞれ別なところの会話の断片である。【例 5a ~ 5d】ではピンクのヨーグルトの見た目(食感)、【例 5e, 5f】では青のヨーグルトとピンクのヨーグルトの食感を評価(描写)している。【例 1 ~ 4】の 30 歳未満の女性の会話とは異なり、【例 5a】で u が独自に評価し、【例 5b】で u が独自に評価し始めるが、t が相づちで同意し、【例 5c】で s が独自に評価し、【例 5d】で t が独自に評価し、【例 5e】で s が青のヨーグルトの食感を表すのにふさわしい言葉(オノマトペ)探しをしようとし、失敗した後、それと対照させてピンクの食感を独自に評価する。【例 1 ~ 4】の 30 歳未満の女性たちがしゃべるのが早く、相手が言っていることをよく聞いてすぐに反応するのは異なり、【例 5a ~ 5c】では同時にしゃべることが多く、同時進行的にそれぞれの参加者の話により会話が進められていくことが見られる。しかし、独り言のように話したり、動作をしたりしているように見えながらも互いを無視しているのではなく、会話の別なところで言葉の繰り返しが見られるため、他の参加者の発話と身ぶりに気を配っていることが分かる<sup>15</sup>。

<sup>15</sup> ここで述べている 30 歳以上と 30 歳未満の女性の会話例の違いはあくまでもこの会話例に限ることであり、本研究は例数が少ないため男女差、年齢差についての一般化は今後の課題である。

【例 5a～5d】は字数の都合上文字化資料を載せず説明のみにする。【例 5a】では u はピンクのヨーグルトの見た目（食感）をオノマトペで評価（描写）する。ヨーグルトの食感を把握するために、ヨーグルトの器を持ち上げ、スプーンでヨーグルトを 4 回掬い上げる。独り言のように、ほかの人とは関係なく、ヨーグルトの見た目（食感）を 6u で「ネツトリしてる気がするけど。」（掬った触感は粘り気がある）と評価する。

【例 5b】では、【例 5a】と類似し、4u「この、（なんていうか）ネツトリ感、」と 6u「//ネツトリ感（????？）||」でピンクのヨーグルトの食感を「ネツトリ」（粘り気がある）と評価する。それに対して、t が 6u と重なって 5t「//うーん、そうだよね↑。||」と相づちで同意する。その後【例 5a】と同様ピンクのヨーグルトを掬い上げながら 9u「柔らかい感じ。」と言う。

【例 5c】では s がピンクのヨーグルトの食感をオノマトペで評価し、全員でピンクのヨーグルトは違うことに同意する。t が 1t で前に u がスプーンで掬い上げた動作に言及した後、s が 3s「なんかこのネツトリ感が、」でピンクのヨーグルトの食感を「ネツトリ」（粘り気がある）で評価し、それに対して t と u が同意する。t は【例 5a】と【例 5b】で u が用いた「ネツトリ」を「NP + ガ」の形で用いることによって u のオノマトペが適切だと認めることになるし<sup>16</sup>、u が「ネツトリ」を用いた時に別な話をしていても無視していなかったことが分かる。

【例 5d】では、ピンクのヨーグルトを特定しようとする中で t が u と類似した動作（ピンクのヨーグルトをスプーンで 10 回掬い上げる）をしながら、小さな声で 5t「// $\frac{1}{2}$ °ネツトリしてるもん<sub>2</sub>||<sub>3</sub>ね。°<sub>3</sub>||」と 10t「(1.0)°すごいネツトリしてる。°||」で「ネツトリ」（掬った触感は粘り気がある）で 2 回評価する。しかし、s と u はそれには反応せず、7s「お料理に使いえ//<sub>1</sub> そうな//<sub>2</sub>か<sub>2</sub>||んじだよねー。<sub>1</sub>||」と 11u「//なにがは||いってんだろう。」で別の話をする。

【例 5e】では、s は青のヨーグルトと（豆乳からできていると全員が一致している）ピンクのヨーグルトを対照させながら t と u とともにピンクのヨーグルトを特定しようとし、その時に青のヨーグルトの上の白い物が気になる。そしてピンクのヨーグルトの商品名として s は FFFF と KKKKK というヨーグルトを候補に挙げる。

【例 5e】 Dairy16-JPN6-9f10f11f-stu-WAS2-blue stu (fff>30)

ヨーグルトのコース (8:01-23:50) 14:42-15:06

1s なんか最初 FFFF かと思った。

# FFFF = ヨーグルトの商品名

2t あー//ー。||

3u //あ||ーー、

4u FF-うーん。 # FF- = 「FFFF」の言いかけ

5s だけどー、

6s (0.5) こんな、 # 青のヨーグルト？



<sup>16</sup> これについてはザトラウスキー (2016) と Szatrowski (近刊) 参照。



とが分かる。そして s がピンクのヨーグルトに関して青のヨーグルトと対照させ、20s 「//<sub>2</sub> こういうのがない<sub>2</sub>|| から //<sub>3</sub> -。||」と言うが、「こういうの」はおそらく s が言及した白い物（乳清）のことを示していると考えられる。次に、t も青のヨーグルトと対照させ、21t ~ 22t 「//<sub>3</sub> ね、|| // 全くないよね。||」とピンクのヨーグルトを指しながら 25t 「分離しないよ // ね。||」と言い、それに対して s と u が同意する。このように 3 人とも青のヨーグルトはピンクのヨーグルトと異なり、上に白い物があり、分離し、小さな塊が複数あるという知識を共有する。そこで s はピンクのヨーグルトの商品名は FFFF だと思ったが、見た目から KKKKKK ヨーグルトの可能性もあると言う。

次の【例 5f】は、【例 5e】の続きであるが、s は青のヨーグルトの食感を表すのにふさわしい言葉（オノマトペ）探しをするが、思いつかない。その後、青のヨーグルトと対照させてピンクのヨーグルトの食感を【例 5a ~ 5d】と同じ「ネットリ」というオノマトペで評価（描写）する。

【例 5f】 Dairy16-JPN6-9f10f11f-stu-WAS2-blue stu (fff>30)

ヨーグルトのコース (8:01-23:50) 15:06-15:32

33s (要はこうなんかこう) パサパサっていう表現は // 違う (けど)、|| # 青のヨーグルト

※左手で胸下の高さで持っている青のヨーグルトを右手のスプーンで指している。

34t // ジャム入れ || してみる。

35s ~ なんて言うんだっけこういうのって、 # こういうの = 青のヨーグルトの食感？

36s ~ ポロポロでもないなたぶ // ん。|| # 青のヨーグルト

37u // う || ーん。

38s なんだろう。

39s (1.5) 言葉の表現が出てこないな。

40s まあこっちはネットリ。 # こっち = ピンクのヨーグルト

※「こっち」から 42s まで左指 2 でピンクのヨーグルトを指す。

41u うーん。

※ t: ブルーベリージャムを加えた緑のヨーグルトを食べ始める。

42s (2.0)° うーん。°

43s (3.5) (????)。

44s (0.5) なんだろ、

45u // うーん。|| # 思案中？

46s ~ // こんだけし || めってるけど (こん) な。 # 青のヨーグルト

※青のヨーグルトを胸の高さまで持ち上げる。

((s: 青のヨーグルトを食べる。))

((t: 緑のヨーグルトを食べる。))

【例 5f】で s は青のヨーグルトの食感を表す言葉（オノマトペ）探しを始める。33s 「(要はこうなんかこう) パサパサっていう表現は // 違う (けど)、||」、35s 「なんて言うんだっけこういうのって、」、36s 「ポロポロでもないなたぶ // ん。||」、38s ~ 39s 「なんだろう。(1.5) 言葉の表現が出

てこないな。」で「パサパサ」(乾いている)と「ポロポロ」(粗く壊れやすい)という候補を挙げるが、両方とも採用しないし、tとuもsが探している言葉を出さない<sup>18</sup>。そこでsがピンクのヨーグルトと対照させながら40s「まあこっちはネツトリ。」で今まで会話の違う部分で3人が言った「ネツトリ」(粘り気がある)ということが共有される。また、【例2～4】と同様ほかの乳製品と対照させてオノマトペで食感を表している。

さらに44s「(0.5)なんだろ、」と46s「// こんだけし|| めってるけど(こん)な。」で青のヨーグルトは水分が多いことを描写することで、言葉探しが終わる。青のヨーグルトの食感(と見た目)は実際に(湿った)小さな塊が複数あるが、それを表すオノマトペは3人とも思いつかない。

このように青のヨーグルトの食感を表す適切なオノマトペがあると思い、言葉探しをしたところ、「パサパサ」→「ポロポロ」→?で終わってしまうが、探している過程の中で類似した音(パ→ポ)が出てくるのが興味深いことである。つまり、微妙な音の変化で様々な食感が表せるという発想で会話が開いていくようである。【例5f】は、【例4】のi「パリパリ」→g「モサモサ」→h「グニャ」のように、多数のオノマトペからふさわしいものを選ぶ過程にそれぞれの参加者が貢献しているのは異なり、1人の参加者(s)の言葉探しではあるが、オノマトペの意味のネットワークの中で候補を見つけ出そうとしている点は類似している。【例5a】～【例5f】の流れは(5)のようになる。

- (5) 【例5a】 s 違う→ピンク：u ネツトリ (スプーンでヨーグルトを掬い上げながら)  
 【例5b】 ピンク：u ネツトリ感→t○→u ネツトリ感→u 柔らかい (スプーンで掬い上げながら)  
 【例5c】 ピンク：s ネツトリ感→t○→u○  
 【例5d】 ピンク：t ネツトリ (スプーンで掬い上げながら) →t ネツトリ (スプーンで掬い上げながら) →s お料理に使いそう  
 【例5f】 青：s パサパサ→s ポロポロ↔ピンク：s ネツトリ

#### ホイップクリームのコース

ホイップクリームのコースからの例であるが、【例6a, 6b】では、30歳以上の男性1人(D)と女性2人(e, f)がホイップクリームを食べながら食感を評価している。

【例6a】 Dairy16-JPN3-4m4f5f-Def-WAS3-blue Def (Mff>30)

ホイップクリームのコース (12:40-28:30)

14:15-15:40

1f 甘い。 #緑のホイップクリーム

2D うん、なんか、

#うん=緑のホイップクリームの味に対する確認



<sup>18</sup> お茶の水女子大学の福留奈美研究員との個人的な会話によるとsが探しているオノマトペは「ホロホロ」の可能性がある。

3f 緑の方が、じゃない、青の方がサッパリしてるかな。

4e こっちがなんか植物性？ #こっち=青のホイップクリーム  
※「こっち」で左指2で青のホイップクリームを指す。

5D なるほど、

6e // 動物性？ || #緑のホイップクリーム ※右指3で緑のホイップクリームを指す。

7D // なんか違うの || かな。

8f これ動物、油っぽい。 #これ=緑のホイップクリーム  
※「これ」で右指2で緑のホイップクリームを指す。

9e 油っぽい。 #緑のホイップクリーム

10D 油っぽい。 #緑のホイップクリーム

11f うん。

12e へいー。 ※緑のスプーンを置き、ピンクのスプーンを手取る。

13f 早い。{フフ//フフ} ||

14D // {フフ} ||

15D 確かにね。

16e これもうさ、 #これ=ピンクのホイップクリーム

17e あの、

18D もう // あれだよ。 ||

19f // シュワシュワ || してるね。

20e アメリカのやつでしょ =

((Def: ピンクのホイップクリームを食べ始める。))

...

((f: ベルを鳴らす。))

49e // {フフフフ} ||

50f // {フフフフ} ||

51D {フフ}

52e いやー。

53f (2.0) なんかね、// これ、 || #これ=ピンクのホイップクリーム

54e // これ、 || でも、なんか、わかんない。

55e サッパリ、コッテリしてるけど、

※「サッパリ」と「コッテリ」それぞれで右指2で青のホイップクリームと緑のホイップクリームを指すことで、青のホイップクリームが「サッパリ」、緑のホイップクリームが「コッテリ」と示す。

56e これなんて言えればいいんだろう。 #これ=ピンクのホイップクリーム

※「これ」で右指2でピンクのホイップクリームを指す。

57D 甘い。{フフ}

- 58e 甘い。
- 59f 食べ物じゃない。 #ピンクのホイップクリームは食べ物ではない
- 60f うーん。 #ピンクのホイップクリームについて思案中
- 61D うーん。 #ピンクのホイップクリームについて思案中  
((De: 青のホイップクリームを食べる。))
- 62f (4.0) やっぱこれが一番食べれるね。 #これ=青のホイップクリーム
- 63D うん。
- 64e サッパリしてる。 #青のホイップクリーム
- 65D これならサッパリしてる。 #これ=青のホイップクリーム
- 66D~真ん中すごいコッテリだ本当。 #真ん中=緑のホイップクリーム
- 67D 油。
- 68e うん。
- 69f 油。
- 70f なんか唇に油が残る感じがする。
- 71D うん。

【例 6a】では、fは1fで緑のホイップクリームが「甘い」と述べた後、それと対照し、3fで青のホイップクリームが「サッパリしてるかな。」で後味が残らず爽やかであることをオノマトペで表す。その後、3人で6e~10Dで青は植物性であるが、緑は動物性のため油っばいという話が続く。次にピンクのホイップクリームについて、fが19fで「// シュワシュワ || してるね。」(細かい泡がはじける)と食感を評価する。また、コースが終わってベルを鳴らした後、青のホイップクリームと緑のホイップクリームを指しながら、eが55e「サッパリ、コッテリしてるけど、」で青が軽くて爽やかなのに対し、緑の食感は油っぼくて重たいとそれぞれの食感を対比させる。また、それを繰り返して64eと65DでeとDが青のホイップクリームが「サッパリ」、66D「真ん中すごいコッテリだ本当。」でDが緑のホイップクリームが「コッテリ」だと同意し合う。

【例 6b】 Dairy16-JPN3-4m4f5f-Def-WAS3-blue Def (Mff>30)

ホイップクリームのコース (12:40-28:30) 23:07-23:50

- 1e てかこっちもう溶けてきた。 #こっち=ピンクのホイップクリーム  
※右手でピンクのホイップクリームの入った皿を e→前→eへ傾ける。
- 2D ああ。
- 3f あっ本当だー =
- 4f ビチャビチャだー。 #ピンクのホイップクリーム
- 5e ビチャビチャ。 #ピンクのホイップクリーム
- 6e (2.6) これはいったい何でできているのか。 #これ=ピンクのホイップクリーム
- 7e これ一番なんかモッサリしてさ、 #これ=緑のホイップクリーム  
※緑のホイップクリームの入った皿を右手で振り、e→前へ傾ける。

- 8D ね。
- 9f うん。
- 10e 強いね。 #緑のホイップクリームが傾けた皿から全くこぼれようとしな
- 11f これだよこれこれこれ。 #これ=緑のホイップクリーム  
※緑のホイップクリームの入った皿を胸前の高さでひっくりかえす。
- 12f ° (????) °
- 13D 結構落ちない。 #緑のホイップクリーム
- 14f これは、 #ピンクのホイップクリーム
- 15e これはやばい。 #これ=ピンクのホイップクリーム
- 16f これはやばい。 #これ=ピンクのホイップクリーム
- 17D **ビシャが。**
- 18e じゃあいきますか？
- 19f いいですか？
- 20D はい。
- ((e: ベルを鳴らす。))
- 21D 結構カロリーとった。
- 22f おなか一杯だね。
- 23D 満腹中枢を刺激する。
- 24f アイス食べたい。
- 25D {フフ}
- 26D デザートは別腹。{フフ}
- 27f **サッパリしたい。**
- 28e うん。
- 29f **これモツタリで。** #これ=ホイップクリームのコース

【例 6b】では、e がピンクのホイップクリームが溶けてきたことに気づいた後、f と e が同意しながらその液体状態を 4f 「ビチャビチャだー。」と 5e 「ビチャビチャ。」とオノマトペで表す。それと対照し、e が 7e 「これ一番なんかモツサリしてさ、」で緑のホイップクリームの見た目が一番重たいと言う。D がピンクのホイップクリームの液体状態を 17D 「ビシャが。」と 4f と 5e と類似した評価をする。f が 27f 「サッパリしたい。」と言った後、29f 「これモツタリで。」でコース全体の後味が重いと言うことでコースが終わる。【例 6a, 6b】の会話の流れを (6) に示す。

- (6) 【例 6a】青 : f サッパリ → ピンク : f シュワシュワ → 青 : e サッパリ ↔ 緑 : e コッテリ → 青 : e サッパリ → D サッパリ ○ ↔ 緑 : D コッテリ  
【例 6b】ピンク : f ビチャビチャ → e ビチャビチャ ○ → 緑 : e モツサリ → ピンク : D ビシャ → f サッパリ したい → ホイップクリームのコース : f モツタリ

**アイスクリームのコース**

アイスクリームのコースからの例であるが、【例7】では、3人の30歳未満の男性（F, G, H）がアイスクリームを食べながら記憶と食感を根拠に緑と青のアイスクリームを特定しようとしている。FとHは緑と青のアイスクリームについて、どれがSSかどれがSSSSCCCかをオノマトペの「シャリシャリ」の食感を根拠に特定しようとする。

【例7】 Dairy17-JPN8-10m11m12m-FGH-WAS3 FGH (MMM<30)

アイスクリームのコース (13:32-29:56) 15:09-15:46

((F: 緑のアイスクリームを食べ始める。GH: ピンクのアイスクリームを食べる。))

1F (4.5) これSSだな。 #緑のアイスクリーム  
# SS = アイスクリームの商品名

2H (2.0) まじっすか↑。  
※ (2.0) でピンクのスプーンを口から出す。

3F う // ん。 ||

4H // シャ || リシャリしてる？

#緑のアイスクリーム

5H じゃあこっちはSSSSCCC？ #こっち=青のアイスクリーム  
# SSSSSCCC = アイスクリームの商品名

※「じゃあこっち」で胸の高さの右手（平H指1～2, 4～5揃握）の指3（伸指先内下）で青のアイスクリームを指す。

6H (0.5) {ア // ハハハハハハハハ} ||

7G // {ハハハハハハハハ} ||

8F // {ハハハハハハハハ} || ハハ

9F わかんない、

10F SSSSSCCCかもしれない。 #緑のアイスクリーム

※「SSSSSSCCCかもしれない。」で胸の高さの左手（平下指1伸指先内指3～5揃曲）の指2（伸指先内）で緑のアイスクリームを指す。

※ G: 緑のアイスクリームを食べ始める。

11F 真ん中はなんか食べたことがありそうだな。 #真ん中=緑のアイスクリーム

※ H: 緑のアイスクリームを食べ始める。

12H (2.0) これ、SSSSCCC じゃないっすか？ #これ=緑のアイスクリーム

※ F: 青のアイスクリームを食べ始める。

13F (1.0) 真ん中？ #真ん中=緑のアイスクリーム

14F (2.0) 真ん中食べたことあるよね↑。 #真ん中=緑のアイスクリーム

15H ありますね。



((H: 緑のアイスクリームを食べる。))

**16H (2.0) あ、でも氷のシャリシャリ感みたいなのが、** #緑のアイスクリーム

**17F SSSSCC ?** #緑のアイスクリーム

**18H ん、シャリシャリ感はSSです。** #緑のアイスクリーム

初めにFが緑のアイスクリームを食べ始め、GとHはピンクのアイスクリームを食べている。Fは1F「これSSだな。」で緑のアイスクリームがSSというアイスクリームだと特定する。それに対してHが2H「(2.0) まじっすか↑。」で驚いた後、4Hで「// シャ || リシャリしてる？」(緑のアイスクリームの食感はSSのようにシャリシャリ(氷の粒が粗い)か)と聞く。つまりFが緑のアイスクリームをSSと特定した根拠は食感がシャリシャリしているからかと確認している。続いてHはまだ青と緑のアイスクリームを食べていないが、青のアイスクリームを指しながら5H「じゃあこっちはSSSSCC ?」で緑のアイスクリームがSSだったら青のアイスクリームはSSSSCCかともう1つの質問をする。Fは5Hに対して9F「わかんない、」と10Fで緑のアイスクリームを指しながら「SSSSCCかもしれない。」と答える。また、11Fで「真ん中はなんか食べたことがありそうだな。」と言っている。4Hに対しては直接答えていないが、緑のアイスクリームがSSSSCCだと思っているのは「シャリシャリ」という食感があるからというよりも食べた経験からのようである。

次にHが緑のアイスクリームを食べるが、最初は12H「(2.0) これ、SSSSCCじゃないっすか？」と言ってSSではなく、SSSSCCだと思っている。その後14Fと15HでFとHが食べたことがあることを同意し合う。次にHが緑のアイスクリームをもう少し食べたら、意見を変え、16H「(2.0) あ、でも氷のシャリシャリ感みたいなのが、」と言ったところでFが17F「SSSSCC ?」で文を終わらせることで共同発話を作る<sup>19</sup>。しかし、その終わらせ方が間違っているため、Hが18H「ん、シャリシャリ感はSSです。」で言い直している。このように「シャリシャリ感」をもとに、試食会で食べているアイスクリームが記憶にあるどのアイスクリームに当たるか互いに議論している。

FとHは緑のアイスクリームを食べながら過去に食べたSSとSSSSCCというアイスクリームを思い出したが、HよりFの方がSSとつながる食感を表すオノマトペに対する感覚が鋭いようである。この例では女性による会話の例ほどオノマトペのヴァリエーションもなく、3人でオノマトペを繰り返す例も少ない。【例7】の会話の流れを(7)に示す。この例の特徴は食感を表すオノマトペ(「シャリシャリ」)を根拠にして緑のアイスクリームを(SSと)特定することである。

(7) 緑: FSS → H まじっすか↑。 → H シャリシャリ? → 青: HSSSSCC ? → F SSSSCC △  
→ 緑: HSSSSCC → H 氷のシャリシャリ感 → F SSSSCC ? → H シャリシャリ感はSS

<sup>19</sup> 共同発話に関してはザトラウスキー (2000, 2003), Szatrowski (2007, 2010a) 参照。

## 5. まとめ

本研究では乳製品の試食会のコーパス（録音・録画された日本語による9会話）でどのようなオノマトベが用いられるか、相互作用の中でオノマトベはどのように用いられるかを考察した。従来のオノマトベの研究は主に1つ1つのオノマトベの意味・音声・機能に焦点が置かれてきたが、本研究は相互作用の中でオノマトベを用いてどのように五感で感じたことを表現したり、確認し合ったりして談話が作り上げられていくかを中心に分析した。参加者は出された7コースの3種類ずつの乳製品を対照しながら、最初は見ただ目で色や触感から、次に匂いから特定しようとし、食べ始めてからは味覚と触覚で味、喉越し、食感等を描写、評価した。オノマトベは食べ物の食感を表すことが多く、特に3種類の乳製品を対照するために用いられた。

相互作用の中では五感（特に食感）と関連させながら、評価・描写の場合は、複数のオノマトベからふさわしいものを選ぶ過程が、特定や評価の場合は、オノマトベによる根拠づけが見られた。オノマトベを含む発話の後、同意、不同意、他のオノマトベの提示等の発話連鎖や言葉（オノマトベ）探しの中でオノマトベのネットワーク性が明らかになった。今後の課題として、試食会以外の食事でのオノマトベの使用について考察することが挙げられる。乳製品の試食会における食べ物に対する感覚的体験は、個人に属するものではなく、参加者が全体あるいは一部を共有することで構築されていく。参加者はほかの参加者の発話をモニターし、言語・非言語行動を用い一瞬一瞬自己の発話を変えていくが、そのような中でオノマトベがその感覚的体験を精密化するのに重要な役割を果たすと考えられる。

## 文字化資料の表記方法

（ザトラウスキー 1993, 2000, 2003, 2010c, 2011, 2013, 2014c, 2015a,b, 2016; Szatrowski 2002, 2007, 2010a,b, 2014a,b）

- 。 下降のイントネーションで文が終了することを示す。
- ? 疑問符ではなく、上昇のイントネーションを示す。
- ↑ 発話、文等が少しだけ上昇するイントネーションで終わることを示す。
- ↑。 文末でイントネーションが少しだけ上昇することを示す。
- ^- 前の母音を延ばしながら一度上昇してから下降するイントネーションを示す。
- 、 文が続く可能性がある場合のごく短い沈黙を示す。
- 長音記号の前の音節が長く延ばされており、—の数が多いほど、長く発せられたことを示す。
- // || //と||はそれぞれ同時に発話された発話の重なった部分の始まりと終わりを示す。同時に発話された発話両方に示す。複数の重複を区別するのに下付数字(//# #||)を用いる。
- (0.5) ( )の中の数字は10分の1秒単位で表示される沈黙の長さを示す。
- ( ) ( )の中の発話が記録上不明瞭な発話を示す。
- @ @ @と@の間の発話が笑いながら発話されることを示す。
- ° ° ° °の間の発話が小さな声で発話されることを示す。

- ・ ・ ・ ・の間の発話が大きな声で発話されることを示す。
  - {カタカナ} { } 内のカタカナによって笑いを示す。それ以外の咳ばらい等の音を示す場合、#で説明を付ける。
  - = ポーズがなくても字数のため改行しないとけないことを示す。前方の発話の終わりに示す。
  - = = 2つの発話間に時間的空白がないことを示す。=を前の発話の終わりと次の発話の始めに付ける。
  - 途切れた音を示す。(食べ - 食べ物)
  - ～ 倒置
  - ※ 発話と同時にされる非言語行動の説明。
  - # どの乳製品を食べたり、飲んだりしているか等、または発話の意味の説明。
  - (( )) 発話間に行われる食べ物行動等に関する説明。
- 相づち的な発話は前の発話の終わりで始めるように右へずらしてある。

## 参考文献

- 秋田喜美 (2017) 「外国語にもオノマトベはあるの？」窪園晴夫 (編) (2017), 55-85.
- 秋山まどか (2002) 「食をめぐる表現—レシピの文章 / 文体について—」『国語研究』 65: 36-46.
- 秋山まどか (2003) 「食感を表わすオノマトベについて」『国語研究』 66: 12-27.
- 福留奈美 (2011) 『調理における沸騰を表す用語・表現の研究』博士論文, お茶の水女子大学.
- Fukutome, Nami, Keiko Goto, Sonoko Ayabe, Mei-Huui Chen, Chen-Chin Chang and Midori Kasai (2011) A study of cooking terms and expressions for the water heating process: English, Japanese and Chinese. *Journal of ARAHE* 18: 100-110.
- Hamano, Shoko (1998) *The sound-symbolic system of Japanese* (Studies in Japanese Linguistics). Stanford, CA: CSLI (Center for the Study of Language and Information) Publications & Tokyo: Kurosio.
- 原田彩 (2012) 「レシピの文体に関する研究—雑誌『婦人の友』の料理記事を対象に—」『國文』 117: 61(1)-51(11). お茶の水女子大学国語国文学会.
- 秦野寛子 (2013) 「雑談にみられるオノマトベ」『國文』 119: 89(1)-74(16). お茶の水女子大学国語国文学会.
- 早川文代 (2013) 「日本語テクスチャー用語の体系化と官能評価への利用」『日本食品科学工学会誌』 60(7): 311-322.
- 早川文代・井奥加奈・阿久澤さゆり・齋藤昌義・西成勝好・山野善正・神山かおる (2005) 「日本語のテクスチャー用語の収集」『日本食品科学工学会誌』 52(8): 327-346.
- 早川文代・風見由香里・井奥加奈・阿久澤さゆり・西成勝好・神山かおる (2011) 「日本語のテクスチャー用語の対象食物名の収集と解析」『日本食品科学工学会誌』 58(8): 359-374.
- 星野裕子 (2015) 「グルメ記事におけるオノマトベ」『ヨーロッパ 日本語教育 19 第 18 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム 報告・発表論文集』 90-94. ヨーロッパ日本語教師学会.
- 岩崎典子 (2017) 「外国人は日本語のオノマトベを使えるの？」窪園晴夫 (編) (2017), 87-102.
- Karatsu, Mariko (2004) Verbal and nonverbal negotiation in Japanese storytelling. In: Polly Sztatrowski (ed.) *Hidden and open conflict in Japanese conversational interaction*, 125-161. Tokyo: Kurosio.
- Karatsu, Mariko (2010) Sharing a personal discovery of a taste: Using distal demonstratives in a storytelling about *kakuni* 'stewed pork belly'. In: Polly Sztatrowski (ed.) (2010b), 113-146.
- Karatsu, Mariko (2012) *Conversational storytelling among Japanese women: Conversational circumstances, social circumstances and tellability of stories*. Amsterdam: John Benjamins.
- Karatsu, Mariko (2014) Repetition of words and phrases from the punch lines of Japanese stories about food and restaurants: A group bonding exercise. In: Polly Sztatrowski (ed.) (2014b), 185-207.
- Kita, Sotaro (1997) Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics. *Linguistics* 35: 379-415.

- Koike, Chisato (2009) *Interaction in storytelling in Japanese conversations: An analysis of story recipients' questions*. Unpublished doctoral dissertation, University of California at Los Angeles, Los Angeles, CA, USA.
- Koike, Chisato (2014) Food experiences and categorization in Japanese talk-in-interaction. In: Polly Sztatrowski (ed.) (2014b), 159-183.
- 窪園晴夫 (編) (2017) 『オノマトベの謎—ピカチュウからモフモフまで』 東京: 岩波書店.
- Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McNeill, David (1992) *Hand and mind: What gestures reveal about thought*. Chicago: Chicago University Press.
- 武藤彩加 (2015) 『日本語の共感覚的比喩』 東京: ひつじ書房.
- Nishinari, Katsuyoshi, Fumiyo Hayakawa, Chong-fei Xia, Long Huang, Jean-Françoise Meulenet and Jean-Marc Sieffermann (2008) Comparative study of texture terms: English, French, Japanese and Chinese. *Journal of Texture Studies* 39(5): 530-569.
- Noda, Mari (2014) It's delicious!: How Japanese speakers describe food at a social event. In: Polly Sztatrowski (ed.) (2014b), 79-102.
- 大橋正房 + シズル研究会 (2010) 『『おいしい』感覚と言葉 食感の世代』 東京: B・M・FT 出版部.
- Pomerantz, Anita (1984) Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In: J. Maxwell Atkinson and John Heritage (eds.) *Structure of social action: Studies in conversation analysis*, 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel A. (2007) *Sequence organization in interaction*. Volume 1. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sunakawa, Yuriko (2010) Manipulation of voices in the development of a story: Prosody and voice quality of Japanese direct reported speech. In: Polly Sztatrowski (ed.) (2010b), 23-59.
- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』 東京: くろしお出版.
- ザトラウスキー, ポリー (2000) 「共同発話における参加者の立場と言語・非言語行動の関連について」 『日本語科学』 7: 44-69.
- Sztatrowski, Polly (2002) Syntactic projectability and co-participant completion in Japanese conversation. *Berkeley Linguistics Society* 28: 315-325.
- ザトラウスキー, ポリー (2003) 「共同発話から見た『人称制限』, 『視点』をめぐる問題」 『日本語文法』 3: 49-66.
- Sztatrowski, Polly (2007) Subjectivity, perspective and footing in Japanese co-construction. In: Ron Zacharski and Nancy Hedberg (eds.) *Topics on the grammar-pragmatics interface: Essays in honor of Dr. Jeanette K. Gundel*, 313-339. Amsterdam: John Benjamins.
- Sztatrowski, Polly (2010a) Creating involvement in a large Japanese lecture by telling the story of a *haiku*. In: Polly Sztatrowski (ed.) (2010b), 267-302.
- Sztatrowski, Polly (ed.) (2010b) *Storytelling across Japanese conversational genre*. Amsterdam: John Benjamins.
- ザトラウスキー, ポリー (2010c) 「講義の談話の非言語行動」 佐久間まゆみ (編) 『講義の談話の表現と理解』 187-204. 東京: くろしお出版.
- ザトラウスキー, ポリー (2011) 「試食会の言語・非言語行動について—30歳未満の女性グループを中心に」 『比較日本語学教育研究センター研究年報』 7: 281-292. [http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/51870/1/39\\_281-292.pdf](http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/51870/1/39_281-292.pdf)
- ザトラウスキー, ポリー (2013) 「食べ物の評価する際に用いられる『客観的表現』と『主観的表現』について」 『国立国語研究所論集』 5: 95-120. <http://doi.org/10.15084/00000506>
- Sztatrowski, Polly (2014a) Modality and evidentiality in Japanese and American English taster lunches: Identifying and assessing an unfamiliar drink. In: Polly Sztatrowski (ed.) (2014b), 131-156.
- Sztatrowski, Polly (ed.) (2014b) *Language and food: Verbal and nonverbal experiences*. Amsterdam: John Benjamins.
- ザトラウスキー, ポリー (2014c) 「試食会における食べ物と家族との関係」 『比較日本語学教育研究センター研究年報』 10: 231-238.
- ザトラウスキー, ポリー (2015a) 「試食会におけるオノマトベ」 『ヨーロッパ日本語教育 19 第18回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム 報告・発表論文集』 95-100. ヨーロッパ日本語教師学会. [http://www.eaje.eu/media/0/myfiles/12%20Panel3%283%29\\_Sztatrowski.pdf](http://www.eaje.eu/media/0/myfiles/12%20Panel3%283%29_Sztatrowski.pdf)
- ザトラウスキー, ポリー (2015b) 「日本語の試食会におけるモダリティとエビデンシャリティの用い方—日本語母語話者と非母語話者のアメリカ人との違い」 阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三 (編) 『文法・談話研究と日本語教育の接点』 159-177. 東京: くろしお出版.
- ザトラウスキー, ポリー (2016) 「未知の食べ物への言及の仕方—試食会における同定と共感—」 『国立国語

- 研究所論集』 11: 93-115. <http://doi.org/10.15084/00000843>
- ザトラウスキー・ポリリー (2017) 「既知と未知の食べ物を巡る曼荼羅」庵功雄・石黒圭・丸山岳彦 (編) 『時間の流れと文章の組み立て—林言語学の再解釈』 239-268. 東京：ひつじ書房.
- Szatrowski, Polly (近刊) Tracking references to unfamiliar food in Japanese Taster Lunches: Negotiating agreement while adapting language to food. In: Andrej Bekeš & Irena Srdanović (eds.) *The JAPANESE language from an empirical perspective: Corpus-based studies and studies on discours*. Ljubljana, Slovenia: University Press, Faculty of Arts= Znanstvena založba Filozofske fakultete.
- 高崎みどり (2015) 「食に関する日本語テキスト中におけるオノマトペの振る舞いについて」『ヨーロッパ日本語教育 19 第 18 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム 報告・発表論文集』 84-89. ヨーロッパ日本語教師学会.
- 田守育啓 (2002) 『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ (もっと知りたい! 日本語)』 東京：岩波書店.
- 田守育啓・スコウラップ, ローレンズ (1999) 『オノマトペ—形態と意味』 東京：くろしお出版.

## On the Use of Onomatopoeia in Interaction: Examples from Japanese Dairy Taster Brunches

Polly SZATROWSKI

University of Minnesota / Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

This paper investigates how onomatopoeia was used in a Dairy Taster Brunch corpus. While contrasting three dairy foods/drinks at a time, the Taster Brunch participants first used sight to assess (describe) the color and texture of the foods/drinks, next, smell to identify them, and then, touch and taste to describe and evaluate the flavor, texture, etc. while consuming them. In the interaction based on their five senses, they assessed (described) the foods/drinks by offering a multiple of onomatopoeic expressions, and used onomatopoeia to justify their identifications and evaluations. Utterance sequences consisting of utterances containing onomatopoeia followed by agreement, disagreement, and presentation of other onomatopoeia, and word (onomatopoeia) searches revealed the network-based character of Japanese onomatopoeia. Onomatopoeia played a significant role in refining the sensory food experiences that participants shared, monitored, and adjusted moment by moment through their language and body movements.

**Key words:** onomatopoeia, texture, food, evaluation, onomatopoeia network